

パメラ・ジェーンズ著
『シェパーズ・ブッシュ——ディケンズ
とのつながり』抄訳（前半）

永 岡 規伊子

訳者解説

19世紀英国ヴィクトリア朝を代表する小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens: 1812-1870) は、産業革命によって急速に都市化したロンドンの貧困や衛生問題をジャーナリズムに訴え、『オリヴァー・トゥイスト』『クリスマス・キャロル』など数多くの小説に、時代が生み出した人々の悲惨な生活を描き出した。一方、「知られざる貴婦人」と呼ばれるアンジェラ・バーデット・クーツ (Angela Burdett-Coutts: 1814-1906) は、若くして遺贈された巨万の資産を社会改良と貧民救済に充てることを使命とし、ロンドンのスラム改善と貧民のための住宅建設をはじめとする多種多様な活動を行った。また、英国女性の博愛事業の報告書を編集・執筆し、1893年のシカゴ博覧会で初めて開設された「女性館」に出展した人物である。¹

20歳代で出会ったこの二人は、貧しい人々への共感という点で一致し、数々の社会的な活動で協働したが、なかでも12年間にわたって心血を注いだ慈善事業が、「墮ちた女の家 (Home for Fallen Women)」の運営である。二人は更生施設を新しく建てるのではなく、「ユレーニア・コテッジ (Urania Cottage)」と名づけられた民家を改装し、その呼び名を引き継ぎながら、家庭的な「ホーム」の運営を目指した。それは売春婦、女性の犯罪者、貧困や虐待で路頭に迷った女性などを一定期間收容して教育し、当時イギリスの国策によってブームになっていたオーストラリア・ニュージーランド・カナダ・南アフリカへ移民として送り出すことを最終目的とする試みであった。

バーデット-クーツの伝記は1978年と1980年に出版され、2008年にはジェニー・ハートレイによって、植民地に渡った女性のその後の調査を加えた研究書『チャールズ・ディケンズと堕ちた女の家』が出版されている。²他にも、ディケンズ研究者によって、バーデット-クーツとの関係やディケンズの慈善観、実際の活動と作品との関連について数多く論じられてきた。そして本抄訳の元となるこの小冊子は1992年に出版され、ユレーニア・コテッジがあったウェスト・ロンドンのシェパーズ・ブッシュ郷土史学会で行った講演をまとめたものである。他の研究書同様に、この冊子に載せられた「堕ちた女の家」の運営、スタッフ、建物、入所者、日々の出来事は、すべてディケンズがバーデット-クーツに送った膨大な手紙を元としている。³バーデット-クーツからディケンズに送られた手紙はディケンズによって焼却処分されたため、これ以上の詳細を知ることはできなくなったが、それでも、全12巻に及ぶディケンズの手簡全集に収められたバーデット-クーツ宛ての手紙は、匿名で運営された「ホーム」の内容を知る上で貴重な資料であるため、ここでも多く引用されている。

全48頁からなるこの冊子は講演から書き下ろしたもののゆえに、論文としてのスタイルが整っておらず、文章の論理的な運びに欠ける箇所が多々ある。また、ホームの意義について問いかけを行いながら、その結論が不明瞭と言わざるを得ない。しかし、講演記録であるからこそ、ディケンズと慈善のテーマを研究する上でのコンパクトな概説書となっているとともに、「ホーム」の建物の納税記録、当時の地図、国勢調査に載った施設の入所者名という、地元の歴史学会ならではの新たな資料が載せられている点で重要な資料である。その意味で抄訳の価値があると考えられる。

またこの冊子には、バーデット-クーツの肖像画、1915年に写された元「ホーム」の建物の写真、当時の地図、ディケンズの小説『ディヴッド・コッパフィールド』に使われた挿絵、ディケンズ自らが編集した雑誌に匿名で載せた「家なき女の家 (Home for Homeless Women)」の記事の1ページ目のコ

ピーが掲載されている。

ここでは、紙面に制約があるため、他の研究書で頻繁に掲載されている内容の部分と、ディケンズの書いた女性受刑者へのアピールの大部分、またディケンズの雑誌記事から著者が抜粋した部分は省いて抄訳としたこととお断りしておきたい。

なお、年代等の明らかな誤りについては、訂正し、訳注に出典資料を記した。

また、本書に記載されたユレーニア・コテッジの教区税の記録を本抄訳前半の末尾に、1861年のセンサスに載った「ホーム」の入所者名の表を抄訳後半の末尾に付した。

抄訳（前半）

ユレーニア・コテッジ

1847年が暮れようとしていたある日、クラーンケンウェルのコールドバス・フィールズ刑務所で二人の若い女が待っていた。彼女たちが刑期を終えた後もそこに留まっていたのは、行き先として約束されていた「ホーム」の準備がまだできていなかったためである。それはユレーニア・コテッジと呼ばれ、ウェスト・ロンドンのシェパーズ・ブッシュ地区のライム・グローブにあった。

ライム・グローブは1950年代からBBCテレビの本拠地として、それ以前はゴーモン映画撮影所として有名であった。

しかしライム・グローブには、それよりずっと以前に「ユレーニア・コテッジ」「ディケンズとのつながり」という語るべき物語がある。

1847年の年末近くにディケンズは、ユレーニア・コテッジが「女性の更生と移民の試み」となる予定だと書いた。

恩恵を受ける対象となっていたのは、最初は、売春に堕ちた若い女性や、軽犯罪で刑務所に入れられた女性たちであった。彼女たちは改心して家事の訓練を受けた後、植民地で新しい生活を始めるために外国に送られることになっていた。

ディケンズは社会改革家で、社会問題に対する彼の態度は小説やその他の著作に明らかに示されているが、ユレーニア・コテッジでの彼の働きを辿ることによって、現実の世界でディケンズがそれをどう考えていたかを知ることができる。彼の著作がいかに真に迫ったものであっても、作品はフィクションである。ここでは、現実の問題に取り組んで活動するディケンズの姿を見ていくことにする。

その「試み」のための資金は、莫大な遺産を相続した博愛家のアンジェラ・バーデット・クーツが用意し、ディケンズがその管理・運用の役割を長年務めた。彼はミス・クーツに代わって、お金が浪費されることがないように、彼の言葉によると「アルゴス（ギリシャ神話に出てくる百の目を持つ巨人）のような」嚴重な見張り役をした。

それまでもディケンズとアンジェラ・バーデット・クーツは協力し、貧しい人々に提供できる唯一の教育手段であった貧民学校のための活動をしていた。

アンジェラ・バーデット・クーツに代わって、ディケンズはロンドンの最も貧困な地域の一つ、ホルボーンのサフロン・ヒルにあるフィールド・レーン貧民学校を訪れ、壊れた家の1階の3室が使われている現実を知る。彼はそのような環境で献身的に働く教師の並々ならぬ熱意に打たれ、ミス・クーツに経済的な援助を促した。ディケンズが最初に行ったのは、学校に石鹸と水とタオルを支給することであった。「まず子どもたちの体を洗うのが先決です」とミス・クーツに伝えている。

バーデット・クーツが売春婦救済のために、何らかのホームに資金を提供したいとディケンズに話したのは1846年5月であった。⁴彼は最初、彼女の名声に傷がつくのではないかと心配し、これまで取り組んできた貧民学校の支援や、ウェストミンスター地区の学校や教会建設の方に力を入れてはどうかと言って思いとどまらせようとした。しかし後に、「同じ女性であるあなたが始めようとするのであれば、その試みは受け入れられ易いに違いない」と考え、彼女に「全身全霊でこの仕事に取り組む」ことを約束した。

アンジェラ・バーデット・クーツ

アンジェラ・バーデットは1814年4月21日に、下院議員のサー・フランシス・バーデットの末娘で6番目の子どもとして生まれた。アンジェラの母親ソフィー・クーツはトーマスとスザンナ・クーツの末娘であった。スザンナの死によってトーマスはハリエット・メロンと再婚し、自分の財産についての全責任を彼女に託した。

ハリエットはトーマスの死後、銀行の共同経営者となり、クーツ家のメンバーから相続人の候補を次々と挙げてみては、さまざまな理由で退けていた。そして最後に彼女はバーデットの家系から候補を考えるようになった。アンジェラはトーマス・クーツを思わせる素質を持っていた。彼女はあまり美人とは言えず虚弱な体質であったが、静かで控えめな上に、優れた決断力を持っていた。彼女は社交の場でよくハリエットに同伴した。

ハリエットは1837年に亡くなり、アンジェラは23歳でクーツ家の財産を受け継いだ。それは祖父の銀行の半分の権利とピカデリーのストラットン通りにある邸宅であった。遺言では、彼女の名前にクーツという名前を加えるように記されていたので、彼女はバーデット・クーツとなり、後にクーツと名乗った。

金貨を並べると24マイル以上の長さになるだろうと当時の新聞が書きたてるほどの財産であった。遺言には、相続人は銀行の経営に加わってはならない、と書かれていた。アンジェラは、数多くの慈善の支援のためにその富を使うことにその後の人生を捧げることになるのである。彼女は自分が関わるすべての物事の背景を調べ、資金を供給するあらゆる事業の現状を把握していた。その範囲は、科学者の支援、教会建設、宣教師への援助、病人や癌研究のための活動支援にまで及んだ。彼女にとって最大の関心事は貧しい人を助けることであつた。人々は「貧しき者の女王に祝福あれ」と彼女を称えた。

ヴィクトリア女王は彼女の功績を認めて1871年に女男爵（baroness）の爵位を与えたが、その後1881年にアンジェラが秘書のアシュメド・バートレットと結婚した時に、女王はそれが「正気の沙汰ではない」と言ったという。彼女は

67歳で彼は30歳以上も年下だった。

この結婚の何年も前になるが、ユレーニア・コテッジの計画をしていた時期に、アンジェラは当時70歳代後半のウェリントン公爵と恋愛関係にあった。彼女の方から公爵にプロポーズしたほどだった。公爵は優しくそれを断ったが、彼が亡くなる1852年まで二人は親しい友人でいた。

アンジェラは財産を受け継いだ時に、ピカデリーのストラットン通り1番地に引っ越した。彼女が売春婦の問題に関心を持つようになったのはこの場所である。家のまわりの通りは女たちであふれ、彼女の家の戸口で客引きをすることさえあった。アンジェラはまだ年端も行かない娘たちの運命を気遣うようになる。1839年に彼女はチャールズ・ディケンズと初めて出会っていたが、この事実を知り、売春婦を救うために何らかのホームを設立したいという願いをディケンズに話すことになるのである。

1906年、アンジェラ・クーツはストラットン通りの家で亡くなり、安置された遺体は一般に公開された。一度に50人の人が棺のそばを一行となつて通り過ぎることが許され、週末に扉が閉められるまでに、あらゆる階級の人々が25,000人も葬儀に出席するために集まった。彼女はウェストミンスター寺院に葬られている。

家

ディケンズは「救護施設」の建物を新たに建設するつもりはなかった。ロンドン市内やその周辺には用途に合う家がたくさんあることを知っていたからだ。彼がミス・クーツに、シェパーズ・ブッシュのアクトン・ロード沿いに家を見つけたことを伝える手紙を書いたのは1847年5月であった。「片田舎ですが、快適な家で、庭と小さな芝生があります。税金はとても安いです」と書いている。

「馬小屋は洗濯場に変えようと思います。庭の周囲には垣根が必要です」。この二つの大規模な改修費用は50ポンドから75ポンドになるだろうと、ディケン

ズは考えていた。

家賃は年間60ギニーで、6年、14年、あるいは21年の契約期間で借りることができた。二人は先のことを考えて21年の借家契約をした。ホームの運営は実際には15年間であった。

ユレーニア・コテッジは、その地方にいくつかの土地を持っている老婦人のエリザベス・スコット夫人が所有していた。彼女は、その地域に住む地主として有名なスコット家の一員であったようだ。⁵ スコッツ・ロードはゴールドホーク・ロードの北に平行して走り、ライム・グローブの西にある。スコット夫人はシェパーズ・ブッシュのホワイト・ホースの近くに住んでいた。

ディケンズは、スコット夫人の事務弁護士で、ニュー・ボズウェル・コート社のホーキングズ、ブロクサム、ストックカーの三氏と「土曜日の2時から3時の間に」会う約束をした。彼らが書類の書き替えのためにミス・クーツの事務弁護士に契約書を送るよう依頼した時である。1848年の公式課税帳にある借地人の欄にチャールズ・ディケンズの名前が書かれているが、それは後に抹消されて、アンジェラ・バーデット・クーツと修正され、最後に登録されているのは1862年2月である。

ディケンズはスコット夫人に、その家を施設として使う予定であることは伝えたが、何の施設かについては話さなかった。彼は、「近隣で彼女たちがレットテルを貼られる」ことがないように、その用途を知られることを望まなかったからである。

ディケンズがミス・クーツに宛てた500通ほどの手紙が残っている。その多くはシェパーズ・ブッシュの「墮ちた女の家」に関する二人の共同作業についてである。これらの手紙が現存し、ディケンズが受け取った手紙と同じ扱いを受けることがなかったのは幸いである。というのは、ディケンズは自分の書簡が悪用されるのを恐れて、1860年にすべて焼却してしまったからである。

ディケンズは計画に取りかかった時から、家具や調度品の備え付けの細かい仕事や適切なスタッフ探しに奔走した。また、彼は収容者の募集も引き受け、

刑務所長と話をし、ユレーニア・コテッジに收容するのにふさわしい若い女性の推薦を依頼した。彼はミス・クーツへの手紙で、ホームの開設について多くの紙面を割いているが、それは当時彼女がウェリントン公爵を熱愛していて、ディケンズが会って話をするのが難しかったからである。公爵はミス・クーツに対して、「あなたが戸口で見かけた若い女性を救える見込みはほとんどない」と言ったが、それ以上計画を思いとどまらせようとはしなかったようである。

1847年8月26日付で、ディケンズはミス・クーツに、ホームを10月初旬までに使えるようにしたいと書いている。すっかり準備が整うまでは彼女がホームを見に来ないようにと願っていた。「ベッドの枠の取り付けは10日以上かかるでしょうし、その後もちょっとした作業があるでしょう」と書いている。

ホームが運営されていた間はずっと、ディケンズはお金がどのように使われたかをミス・クーツに知らせていた。彼は会計全般に関わり、1か月の請求書は41ポンドから43ポンドだったようだ。家政婦長にはかなりの金額が支払われ、5ポンドから、場合によっては50ポンドと金額はまちまちであった。

1850年9月22日付の手紙では、その前日にグreek通りにある下水局を訪ね、「下水溝について、いかにも悲痛な心に訴える請願を行った」とディケンズは書いている。監督官は彼に「連絡を取る」と約束した。この訪問は成功だったようで、1850年11月にロンドンの下水局から700フィートの下水パイプを敷設するという知らせが残っており、「チャールズ・ディケンズ氏」はそれに対して「75ポンド」を支払っている。当時このハウス—この書類ではマリア・コテッジと書かれているが—の排水は汚水溜めに頼っており、ニューロードとその頃呼ばれていたゴールドホーク・ロードにある一番近い下水溝までパイプが引かれていた。(1840年代には、グラント・ジャンクション上水道局がシェパーズ・ブッシュまで水を供給していた。)

下水の問題は繰り返し起こった。1857年の2月3日には、「シェパーズ・ブッシュの排水管が突然ひどい状態になって、收容者に病気が蔓延する危険が

あったため、建築業者にそのことを知らせました。土曜日ではありましたが、すぐに修理に駆けつけるようにと指示せざるを得ませんでした」と書いている。彼はその費用の見積もりが「30～40ポンド」であることをミス・クーツに知らせている。

ユレーニア・コテッジは、ディケンズの設計に従って1853年に拡張された。建設業者はキュービッツであった。

「ガスは門のところまで来ています」と、1857年にディケンズはミス・クーツに書いている。「それを家の中に引いてもらいたいと思っています。そして台所と洗濯場と風呂場と、それぞれの寝室の暖炉の上の天窓にガス灯の吹き出し口をつけることを提案します。そうすれば、明かりを持って歩かなくてもいいでしょうから」。

新しい浴槽が備え付けられ、乾燥室が造られた。ブルームズベリーの建築業者ウィリアム・ジークスは、「これまでこんなものを運んできて組み立てたことはありませんが、きっとできますよ。乾燥室は、6フィート四方で7フィートの高さがいい。鉄製で外は木で覆いましょう。乾燥装置を設置する場所で洗濯用の水を沸かすために銅製の洗濯用ボイラーを設置してはどうでしょう。そのままにしておけば乾燥室の余熱になってしまうだけの熱を使って、この銅製ボイラーに入った湯を常に熱く保つことができます。25分あれば乾燥室にあるすべての物を効果的に乾かすことができるので、日中は5分毎、20分毎に濡れた服や巻布などでいっぱいにしても大丈夫です。それにはおおよその見当で150ポンド、3週間で完成すると思います」。

これと同じ乾燥装置がもっと大規模に作られ、軍の病院用としてクリミアに送られた。

チャールズ・ディケンズ

このような多忙さにもかかわらず、ディケンズは、『バーナビー・ラッジ』『ディヴィッド・コッパーフィールド』『荒涼館』、そして『ハウスホールド・

ワーズ』という週刊誌の執筆に加えて、(ユレーニア・コテッジの設立に走り回っている間に)『ドンビーと息子』を書き上げている。しかし1855年に、彼は友人のウィリアム・ウィルズをミス・クーツの私設秘書に推薦した。これによって、細かい仕事の大部分から解放されたが、彼は委員会の会合にはその後も出席し、ユレーニア・コテッジへの関心を持ち続けた。

チャールズ・ディケンズは1812年2月7日に、エリザベスとジョン・ディケンズの2番目の子としてポーツマスに生まれた。彼の母親は有能な主婦ではなく、夫の収入以上にお金があると見せかけていたようだ。一方父親は愉快で気前がよく、お金には全く無責任であった。一家は経済的な問題でよく引っ越しをしたが、1817年までにはジョン・ディケンズはチャタムの海軍造船所で良い仕事を得た。それから数年間一家はそこで暮らし、チャールズは学校に通った。1822年にジョン・ディケンズはロンドンに引っ越すが、その時までには、一家の家計は再び逼迫していた。チャールズは学校に行けなくなり、12歳の時にストランドの近くのハンガーフォード・ステアーズにあったウォレン靴墨工場に働きに出された。彼は週に6シリングの給料で、一日に12時間靴墨の瓶の封をしたり、ラベルを貼ったりして働いた。彼はその仕事も、仲間も、自分が置かれた状況に対しても嫌悪感を持ち、学校に行けなくなったことに激しく憤った。

1824年にジョン・ディケンズと妻と小さな子どもたちはマーシャルシー債務者監獄に入れられ、チャールズは「陰気で何も無いところ」と述べている部屋を間借りすることになる。⁶ 彼はとても寂しかったので、マーシャルシー監獄の近くのラント・ストリートに屋根裏部屋を見つけてもらう。そのお蔭で家族と一緒に朝食と夕食を取ることができるようになった。

家族はマーシャルシー監獄に3か月住んだが、下層階級の労働をしなければならなかったことに加えて、この屈辱は若いチャールズ・ディケンズに消えることのない強烈な印象を与えた。父親はついにはチャールズを再び学校に行かせることができるようになり、彼は15歳まで学校に通った。その後、事務弁護

士の事務所で2年間働いたが、仕事は好きになれなかった。彼は速記を習い、民法博士会館で自由契約のレポーターとしての新しい仕事を始めた。そのことが、彼を著作の道へと導くことになるのである。ディケンズがロンドンの暮らしのいかがわしい一面を直接に目撃したのは、このような人格を形成する時期であった。この経験によって彼は社会改良に興味を持ち、ついには、ユレーニア・コテッジの設立と経営に関わることになる。

ディケンズはマライア・ビードネルという若い女性と初めて恋に落ちるが、求婚は失敗に終わる。後に彼はキャサリン・ホガースと出会い、1836年4月2日に結婚する。二人には10人の子どもが生まれ（娘が一人亡くなる）、長男のチャーリーはアンジェラ・バーデット・クーツの息子のような存在になり、彼女はチャーリーのためにイートン校の教育費を支払っている。1845年に、チャールズ・ディケンズは『マーティン・チャズルウィット』を彼女に献上している。ディケンズはそうのように大家族を持っていたにもかかわらず、結婚生活はあまり幸せなものとはいえず、1858年の離婚は大きなスキャンダルとなった。ミス・クーツは非常に心を痛めて離婚に反対し、二人を和解させようと試みたが無駄であった。その後、彼とミス・クーツはそれまでと同様に共同して働くことはなかった。ディケンズは若い女優のエレン・ターナンに夢中になり、資金を出してペックナムのリンデン・グローブに家を構えさせた。

ディケンズは、1870年6月9日、ケントのギャズ・ヒル・プレイスの家で脳卒中のために亡くなり、ウェストminster寺院に埋葬された。

ディケンズは自分のまわりで見た現実の生活や人物を小説に描いた。彼の更生施設に収容された人々もまたその素材となっている。

入所者の一人であるイザベラ・ゴードンは、伝えられるところによると、極めて手に負えない人物だったようだ。1849年8月12日に、彼はイザベラを追い出すことになるだろうとアンジェラ・クーツに宛てた手紙に書いている。ディケンズは家政婦長のモーソン夫人に、もしそのようになれば、「彼女の出て行く様子を正確に」伝えてくれるように頼んだ。彼は「特別な理由」があって、

「彼女の振る舞いを観察してほしい」と言っている。

イザベラはその時は猶予されたようだが、再びトラブルを起こすのにそれほど長くはかからなかった。今回こそ彼女は出ていかざるを得なかった。ディケンズはホームで開かれた委員会に参加していて、自分の目で彼女を観察することができた。

イザベラは別の2人の女と共謀して、家政婦長への非難をでっち上げたが、それを委員会は「まったくの偽りで悪意がある」と認めた。

その事件が審議されている間、彼女は自分の部屋にいるように命じられたが、「舞踏会でレディがするようにスカートを揃んで、モーソン夫人の前を踊りながら階段を上がっていった」。その後、彼女は一階に呼ばれて、ホームを出ていくように言われた。

その決定はホーム全体を驚かせ、悲しませた。それは11月で、すでに外は暗くなっていた。少女は、一夜の宿泊代として半クラウン貨と、他に衣服をもっていないだったので、粗末なショールを与えられた。

ディケンズは彼女の出て行く様子をこのように描写している。

「若い女は、今や本当にこのようなことになってしまったので、泣き叫び、頭をうなだれた。戸口から出ると、彼女は立ち止まり、門のところに行く前に、1、2分のあいだ家に寄りかかっていたが、この上なく惨めで不幸な様子だった。「その後、私たちはショールで顔を拭きながらゆっくりと立ち去る彼女を路地のところで追越した」。

ディケンズがモーソン夫人に最初に依頼した「特別な理由」は明らかである。

ディケンズは当時、『ディヴィッド・コッパーフィールド』の月刊の一分冊を書いてしたが、この事件の後すぐに、現在の版の第22章となっている、「懐かしい光景と新しい人たち」という章を書いた。彼は登場人物の一人であるマーサ・エンデルの悲惨と恥辱の生活への旅立ちを、これと非常によく似た言い回しで物語っているのである。

「そしてマーサは立ち上がって、ショールを身に巻き顔を覆うと、声をあげて泣きながら、ゆっくり戸口の方へ進んでいった。出ていく前に、何か言おうとしたのか、それとも引き返そうとしたのか、一瞬立ち止まったが、彼女の口から一言も発せられることはなかった。」

興味深いことに、『ディヴィッド・コッパーフィールド』のマーサ・エンデルは、移住することになる（第57章「移民」参照）。それはイザベラ・ゴードンに降りかかった運命とは少し違うものだが、彼女に最初に計画されていたのが海外移住であった。

ロンドンの売春婦

ディケンズの生きた時代は、賃金を得ることのできる女性の仕事はきわめて少なかった。扶養してくれる家族も夫もない女性にとって、将来の見通しは全く暗いものであった。ある18世紀の作家は、貧民救済を目的とする救貧法を、継ぎはぎのためにまだら模様になった貧民の衣服になぞらえてパッチワークと評した。その一世紀後には、貧民救済に関する130の国会制定法があったと言われている。院外救済（居宅で現金が直接支給される）は止むを得ない場合に認められてはいたが、一般的には救済は恐るべき非情な管理体制に置かれたワークハウスに収容されることを意味していた。

そのため、多くの女性には売春と軽犯罪が生き延びるための唯一の方法と思われた。そのような生活の末、更生施設に一時収容されることがよくあった。

ミス・クーツへの手紙で、ディケンズは「刑務所を出た貧しく若い女」について述べている。「私たちが抱えている別のケースと同じく、彼女は若い時にその道に入ってしまったが、それ以外にどうすることもできなかったのです。このような不運な女性たちになぜ何の機会も選択肢も与えられていないのか、と考えるのも恐ろしいことです。もし彼女たちのうちの数人でも現状から救われていたとしたら、それは社会の驚くべき奇跡だっただろう、という残酷

な事実から目をそらすことはできません」と書いている。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』の作者であるヘンリー・メイヒューは、ロンドンだけでも80,000人以上の売春婦がいたと推定している。

ユレーニア・コテッジの運営

「経験を積んだ数人の紳士たちで構成する」委員会は月に一度開かれ、会計監査をしたり、報告を受けたり、ホームの運営全般について話し合ったりした。委員会にはコールドバス・フィールズ刑務所の所長である G. L. チェスタトン、ウェストミンスター・トットヒル・フィーズ刑務所の所長補佐であるオーガスタス・トレイシーが含まれていて、この二人は、自分たちの刑務所からホームにふさわしい若い女性を推薦した。彼らは、1848年1月に、ユレーニア・コテッジが「裁かれて投獄された経験がない若い女性たちも数人受け入れるべきである」と提案した。「両者が混じり合うことがホームの健全な運営に必要」と考えたからであった。委員会ではすべての収容者の一人ひとりと面接をすることになっていた。ホームの中では彼女たちの経歴について触れられることは決してなかった。実際、ディケンズはミス・カンリフというスタッフがイザベラ・ゴードンに前歴を聞き出そうとしていたのを知って非常に怒った。

ホールズワース夫人は最初の家政婦長で、やがてモーソン夫人とマーチモント夫人に引き継がれた。

ホールズワース夫人を手伝っていたのがフィッシャー夫人であった。家政婦長の補佐を務めるのは若い人のほうがよいということになっていた。フィッシャー夫人は26歳で、「この事業にとっても興味を持ち、温厚で親切な態度で若い人々を教育することに慣れていた」。当時、一日おきの夕方にホームを訪ねていたディケンズは、1847年11月20日のミス・クーツ宛ての手紙で、フィッシャー夫人について次のように書いている。「彼女が初めて当番となった夜の皆の勉強ぶりをお見せしたかったです。彼女が飼っていたカナリアがテーブルのあたりを歩きまわる中を、二人の少女は私の作った教科書に夢中になり、そ

こからあらゆる知識を得ることに没頭していたのです」。

しかし残念ながら、たった1か月後の12月29日にディケンズは、アンジェラ・クーツに宛てて再びフィッシャー夫人について手紙を書くことになる。ディケンズの希望に反してミス・クーツは彼女を解雇したのである。「彼女の離脱が非常に残念でならないとしか言いようがありませんし、その理由は私にはとてもつらいものです」。フィッシャー夫人が非国教徒であることを隠していたのが理由だった。ミス・クーツは夫人が非国教徒であることに異議があったわけではないが、契約の時にその事実を隠していたことを問題にしたのである。それで彼女は出て行かなければならなかった。

フィッシャー夫人が辞した土曜日に、グレイズ夫人が到着した。ディケンズは、彼女の「気難しい上流気取りが心配ですし、表情も陰気です」と述べ、1848年5月23日には「グレイズ夫人は理由もなく歩かずにおれないので、他の誰もが彼女の後について歩かなければならなくなるのだという印象を受けました」と書いている。

1848年8月13日に、彼は二人の夫人についてこのように書いている。「グレイズ夫人とホールズワース夫人を鎖でつないでおいてほしいものです。我慢しながら重労働をしている、という体の奥方様たちから、上品ぶった偉そうな態度を見せられるのはまっぴらです。ホールズワース夫人が私に異議を唱え始める時の顔を、あなたに描いて見せたいほどです」。ディケンズは最初はホールズワース夫人について不信感を持っており、「彼女は、自分が受け持って面倒を見ている若い女は自分の敵だと心の奥底で思っているようです」と書いていた。しかし後に彼は「そういうつもりはないのに」彼女を好むようになった。

他にもそのような人がいた。ミス・カンリフはディケンズに最初良い印象を与えていたが、1849年1月27日付では、「彼女が残酷な気質の女性であることは、確信をもって言えます」と書き、2月5日には、「私は土曜日にホームにいましたが、ミス・カンリフは家庭劇に登場する芝居マニアのように思えま

す」と書いている。後になって、「ミス・カンリフは（出て行くのだからどうでもいいとはいえ）、彼女（イザベラ・ゴードン）の過去の生活について本人に聞き出そうとしていたのです」と書き、3月までにディケンズは、「私がホームにいた時、ミス・カンリフが一頭立て貸馬車（一種の貸馬車）に乗って、非常にもったいぶった態度で自分から出て行った」ため、ホームは再びすべてがうまくいき始めたが、出て行った様子から彼女は「やっぱり芝居マニアだと思った」と書いている。

ミス・ファーズもその例である。ディケンズは彼女が「ナツメグおろし器のように、自分の仕事は少女たちを削ったりヤスリをかけたりして、形を整えることだと思っています」と書いている。

モーソン夫人は「まさしく私たちがずっと待ち望んでいた人」で、1849年3月頃からホームで働いている。その当時、もう一人の家政婦長はマッカートニー夫人であった。1854年にモーソン夫人は再婚のためにホームを去った。彼女のかわりにマーチモント夫人が来たが、彼女は「モーソン夫人のような明るさが全くなく、平凡な顔立ちで気が利かない」と好意的ではない描写がされている。しかし、マーチモント夫人は内に秘めた自負心を持っており、委員で刑務所長のトレイシー氏は、彼女はきつとうまくやっていくだらう、と確信していた。

ハウスの運営上の問題が頻繁に言及されているが、全体としては順調に進んでいた。1856年5月27日にディケンズは、「ブッシュで委員会を開きましたが、すべてうまく運んでいます」と書き、1857年の7月には、「シェパーズ・ブッシュにて、水曜日、すべて順調です。何の苦情も問題点もありません」と記している。

訳注

この抄訳のテキストは、Pamela Janes, *Shepherd's Bush. . . . The Dickens Connection (The Story of Urania Cottage: Home for Fallen Women in Lime Grove, Shepherd's Bush)*, Shepherd's Bush Local History Society, 1992. である。

- 1 『女性の使命』は1892年にバーデット・クーツが構想し、翌年のシカゴ万国博覧会に出展された。(Arranged and Edited by, with Preface and Notes by The Baroness Burdett-Coutts, *Woman's Mission; A Series of Congress Papers on the Philanthropic Work of Women, by Eminent Writers.*, New York and London, 1893. 2013年に Cambridge Library Collection として復刻され、また現在以下の URL に全文公開されている。https://archive.org/details/womansmissionser00burdiala)
- 2 バーデット・クーツの伝記の主なものは次の2冊である。
 - ①Diana Orton, *Made of Gold: A Biography of Angela Burdett Coutts*, Hamish Hamilton, 1980.
 - ②Edna Healey, *Lady Unknown: The Life of Angela Burdett-Coutts*, Sidgwick and Jackson, 1978.
ディケンズとユレーニア・コテッジについての最近の研究書として以下のものがある。
 - ③Jenny Hartley, *Charles Dickens and the House of Fallen Women*, London: Methuen, 2008.
- 3 ディケンズの手紙はいくつもの版で出版されているが、ここでは、以下の版を参考にした。
 - ①*The Pilgrim Edition, The Letters of Charles Dickens, Vols.1-12.*, Oxford University Press.
 - ②Edgar Johnson ed. *Letters From Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts, 1841-1865.*, London: Jonathan Cape, 1953.

- 4 原文には1847年5月となっているが、初めてホームについて触れられるのは1846年5月26日のディケンズからバーデット-クーツに宛てた手紙である。*The Pilgrim Edition, Volume 4 (1844-1846)*, 1977. 552-556.
- 5 末尾の「教区税記録」参照。
- 6 原文には1823年とあるが、父親のジョン・ディケンズが負債のためにマーシャルシー監獄に収監されたのは、1824年2月20日から5月28日までである。

*1853年の教区税記録より、ライム・グローブの所有権の詳細：アクスブリッジ・ロードからニュー・ロード（現在のゴールドホーク・ロード）まで
 教区税 課税請求額

No.

1821年 家屋と土地 0ポンド5シリング0ペニー

1822年 庭

土地所有者：シッチ J&H

借地人：ジョン・テイラー

1815年 家屋と庭 1ポンド5シリング0ペニー

1816年 庭

土地所有者：ブライドウェル アンド ベスレヘム病院院長

借地人：ベンジャミン・ホール

1818年 耕地と一部牧草地 1ポンド6シリング0ペニー

1819年 荒地、池と一部庭

1817年 家屋と庭

土地所有者：エリザベス・スコット

1790年 家屋と納屋

1791年 柳の林、池と一部庭 1ポンド7シリング0ペニー

1791A年 レンガ再生工場

土地所有者：クリスティアナ、アンジェリーナ、ジュリエット・
 スタインバーグ

借地人：上記の者

The first half of *Shepherd's Bush*. . . . *The Dickens'*
Connection by Pamela Janes

Kiiko Nagaoka

Among the numerous female philanthropists in Victorian England, Angela Burdett-Coutts is famous not only for her various kinds of charity work but also for her connection with Charles Dickens. They cooperated to improve the lives of the poor, and Urania Cottage, a home for fallen women, was the project into which they poured their souls into the most.

This booklet is “an expansion of a lecture given by Pamela Janes of the Shepherd's Bush Local History Society at the West London Local History Conference”, and includes important information such as the title record of property in Lime Grove from 1791 to 1821 and a list of the occupants of Urania Cottage taken from the 1861 census. Until now several biographies of Burdett-Coutts and innumerable biographies of Charles Dickens have been published, and the novelist's involvement with Urania Cottage has already been much discussed. The present leaflet will contribute to furthering Dickens' studies, both as a unique and compact guide to the local history surrounding the House and as a research work on the Dickens' view on people in desperate need.